



安城特別
支援学校の1年

7月・企業での実習 ④

「特別支援学校の卒業生も、企業の大切な戦力」。生徒たちの企業実習の受け入れ先の一つ、刈谷市一里山町の自動車部品関連会社「ツルタ製作所」の鶴田昌宏会長は話す。「同じ社の仲間として楽しく働いてもらえるかどうか重要。実習はそれを確認し合う場と捉えています」

乗用車や福祉車両、産業車両の部品の金属プレスやスポット溶接、切削加工などを手掛ける。従業員は二百八十人。刈谷市のほか、岐阜県御嵩町にも工場を構える。コロナ禍にあっても安定した業績を維持している。

安城特別支援学校の実習を受け入れるようになったのは、二〇〇五年からだ。「工場は危ない作業が多いと思われがち。でも自動化を進め、安全に作業できる

よう配慮している」。とはいえ、知的障害者のための仕事が特別に用意されているわけではない。他の社員と同じように、実習中に適性を見ながら入社後に配属する職場を考える。

「当初は障害がどの程度であれば働けるのかと、学校側にも迷いがあつたようだ」と鶴田さん。実習中の様子から「この生徒には別の業種の方が向いているのでは」と助言することもある。

「障害の有無にかかわらず、誰にでも得手不得手はある。『自分でできる仕事がある』と自信が持てれば、楽しく続けられる」と鶴田さん。その思いに込え

黙々と作業に取り組む卒業生（左側の2人）ら「刈谷市のツルタ製作所」



るように、実習中に新たな一面を見せ「こんなにも力が驚かせる生徒もいる。が付いていたのか」と教員

実習中は、二十代の従業員が「ブラザー」として生徒を担当する。各部署を回りながら、仕事の手順や機械の扱い方、注意事項などをつきっきりで教える。分からないことがあればすぐに質問できる体制を整え、生徒の不安を取り除く。ブラザーは毎日、生徒の様子を報告書にまとめる。

「（部品の入った）箱の置き方に苦労していた」「材料がなくなると、きちつと報告してくれた」「掃除もしっかりとできた」「少し疲れたがたまってきた」

「少し疲れたがたまってきた」報告書には、その日の生徒の姿が細かく書かれている。酒井さおり総務部長は「ブラザーも思い入れを持って指導している。実習後に『あの生徒は入社してくれませんか』と問い合わせてくる従業員もいます」と話す。実習中の生徒に寄り添うブラザーの存在は、入社後のミスマッチを防ぐためにも大きな役割を果たしている。（四方さつき）

他の社員と同じ「戦力」